訂正とお詫び・Errata

本誌52巻2号（2005年11月発行）の「日本産ブラックバスにおけるミトコンドリアDNAハプロタイプの分布」（高村健二）論文に誤記があります．Table 3 (p. 112) のSite code Mg-1におけるHaplotype nの個体数3とHaplotype pの個体数2は誤りです．これらの個体数をそれぞれSite code Mg-2に移し替えてください．読者のみなさまにご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げます．

書評・Book Review

魚類学雑誌
53(2): 195

魚類環境生態学入門—渓流から深海まで，魚と棲みかのインターアクション—． 猿渡敏郎（編著），2006．東海大学出版会，秦野．318 pp. ISBN 4-486-01729-3. 3,800円（税別）．

本書は東海大学出版会から発刊されている「東海大学自然科学叢書」シリーズの最新刊である．ハードカバーとやや硬めのタイトルから想起される記載的なイメージとは異なり，第一線のフィールドワーカーが最前線の研究成果をわかりやすく解説した本である．第11章の文献レビューを除けば，個々の研究者が長年取り組んできた研究成果を，それぞれの生息環境の簡潔な解説を交えながら，まとめ上げたものとなっている．著者の平均年齢は非常に若く，頭脳と体力を駆使した野外生態研究のプロセスが丁寧かつ溢れる臨場感をもって記述されている．

本書は4部12章からなっている．以下，簡単に紹介する．第1部「身近な水域での生態」では，渓流，田んぼ，汽水域，渚における生態を5章にわたって紹介している．具体的には，利根川水系鬼怒川におけるイワナとヤマメの巧みな共存機構（第1章），球磨川水系川辺川で意外な方法でヤマメの産卵床の特性と卵の生残を解き明かした第2章，田んぼを利用する魚の視点からみた水環境を人間活動を交えながら平易に解説した第3章，そして関東平野に奇跡的に残された汽水湖涸沼を舞台に20年間にわたって行われた緻密な調査の成果（第4章）と千葉県館山湾の砂浜海岸で自作の層別ネットで明らかにしたシロギスの初期生態（第5章）から構成されている．

第2部「海洋での生態」では，有明海，サンゴ礁，深海，南極海での研究成果が紹介されている．これまで知見が乏しかった有明海固有の絶滅危惧種，アリアケシラウオとアリアケヒメシラウオの生活史に関する最新の知見とその保全対策（第6章），西表島，久高島，瀬底島において緻密な潜水観察と野外操作実験を駆使してサンゴ礁魚類の種多様性を支えるしくみに迫った第7章，その資源量の多さから近年注目を集めているハダカイワシ科魚類の想像を超える生態の多様性を明らかにした第8章，南極魚類ダルマノトを水槽内で産卵させ，その巨大浮性卵を育て，南極海の生き残り戦略にアプローチした水族館研究者の熱意と高度な飼育技術が結晶したすばらしい成果を記述した第9章からなっている．

第3部「魚の回遊と環境」ではマアナゴの葉型仔魚ノレソレが黒潮特急と能動的鉛直移動で巧みに沿岸域に来遊することを長年の広範囲にわたる乗船調査で明らかにした第10章，サケマスの産卵後死体ホッチャレが川とその周囲の生態系で果たす役割についての文献レビュー（第11章）からなっている．

第4部「魚と環境教育」では水産高校が遡河回遊型ワカサギを実習教材に取り上げ，高校生と地元漁師とともに生活史を明らかにしていく過程がいきいきと綴られている．

はじめから最後まで通読しなくても，読者の興味のあるところから読んでみると良いと思う．編者のまえがきにあるように，魚の生活史を通して，魚と環境との有機的な結びつきに重点をおいた日本語の教科書はこれまでなかったように思われるが，本書はその出発点となるものと確信する．そして，この本が提供してくれる研究上の多様なアプローチは，これから魚類の野外生態研究を進めようとしている者に大きな助けとなるはずである．コラムには携帯型GPSの活用方法，巻末には用語解説もついており，研究のスタートラインに立った卒論生や大学院生に是非勧めたい一冊である．

（望岡典隆　Takanori Mochioka；〒812-8581　福岡市東区箱崎6-10-1　九州大学大学院農学研究院動物資源科学部門海洋生物生産学講座水産増殖学分野　e-mail: mochioka@agr.kyushu-u.ac.jp）